射程
黒い蝶

井上靖

黒い蝶　射程

井上靖

新潮社版

黒い蝶・射程

〈井上靖小説全集 9〉

昭和48年4月15日印刷
昭和48年4月20日発行

定価 650円

© Yasushi Inoue, 1973.
Printed in Japan.

著者 井上靖
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一 電話
東京二六〇一一一一一 郵便番
号一六二 振替東京八〇八
印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

黒い蝶　五
射程　一七六
自作解題　四一〇

装画 加山又造

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

井上靖 小説全集 第9巻

黒い蝶

一　章

昭和二十八年の聖降誕祭前夜を明日に控えた日のことであった。この二、三日来北西の季節風が強まり一時陸上では十五メートル、海上では三十メートルの強風が吹いたが、それがこの日の朝になってぴたりとやむと、低気圧の置土産である本格的な寒波が師走の大阪の街衢を襲い始めていた。

桜橋交叉点の近くにある三田村計量器店の前へ、M商会の名を記した小型トラックが停まったのは午前九時であった。トラックからは若い三人の男が降り、店の中央に並べてあった台秤七個と体重秤五個を鋪道へ持ち出して、それを次々に三人がかりでトラックに積み込んだ。さほど広くない店内は大型の商品をごっそり持って行かれて、急に大きな穴があいたようながらんとした感じになった。

十一時にもう一台別の小型トラックがやって来た。こんどは難波のS計量器店のトラックだった。この方からは中年の神経質そうな男が降り、店内を物色するように歩き廻った挙句、店の右側の棚の上に並べてあった何種類かの棒秤、皿秤、手秤などをこの店の店員に手伝わせて車の中に運び込み、店員の一人に彼が持ち出した商品の数量を書き記した紙片を渡して引き揚げて行った。ここに於いて店は全く計量器店としての体裁を剝奪され、あとは左側の壁に沿って棚の上に置かれてある数個の硝子ケースの中に、圧力計、流量計、温度計、寒暖計、メートル・グラス、巻尺、そういった小さな商品が残っているだけになった。

午後になると、こんどはR商店の名刺を持った若い男が小さいリア・カアを持ってやって来て、硝子ケースごとその中の商品の全部を車に移し、それから帰りがけに店先の隅の方に埃をかぶって置かれてあった硝子製細管のL型温度計の束を見附けると、それを抱えて出て行った。

夕方、最後に店に残っている陳列ケース、事務机、椅子、それからストーヴ、マット、傘立てなど目ぼしいものの全部を運び去るために、古道具屋の親父が大型トラックから肥満した体を降ろした。

店内はこのために三十分程混雑を極めたが、そのトラッ

クが引き揚げて行くと、あとは火の消えたように静かになった。店員の使っていた薬罐、茶碗、スリッパ、バケツ、そうしたがらくた物だけが縄切れや紙屑と一緒に床の上に放り出されてあるだけである。それさえも、しかし、薄暮の街衢に燈火がともる頃になると、親子の屑屋の女が二人やって来て一物も残さずきれいに浚って行ってしまった。

店は今やコンクリートとベニヤ板で囲まれた一個の単なる長方形の箱でしかなかった。そしてその箱の中では、二人の男店員と一人の女店員が一つだけ残された焜炉の炭火を囲んで、彼等の最後の報酬を受け取るために店の責任者である三田村伸作の帰りを待っていた。三田村はこの日一日ここで店をたたむ作業を指揮していたが、夕方ちょっと出掛けて来ると言い残して、あわただしく何処かへ姿を消していた。従業員たちは彼が自分たちに払う最後の給料を工面しに行ったことを知っていた。

炭火を囲んでいる三人の話題は、彼がうまく何処からか金を調達して来れるかどうかということであった。しかし時々金の問題を離れて、彼等の間には何故この店が倒産の運命を招かなければならなかったかということについての意見が交わされた。

「大体、この計量器店という奴は普通に営業さえしていれば、失敗したくたって失敗なんかできないようにできているんだ。商品は検定合格品だしさ、いくら莫迦だって不良品を掴まされるってことはありゃあしない。利益は確実に二十パアセントある。昔から計量器店の破産なんて聞いたことあないよ」

三人の中では一番年嵩の、どこか陰気なところのある小柄の中年の男がいかにも忌々しいといった口調で言った。戦前計量器問屋に勤めていて、この店で多少専門の知識を持っていると言えるただ一人の人物であった。すると、

「計量器を扱っているくせに、経営の方はまるで無計量なんだからひでえもんさ」

もう一人の若い店員が言った。この方は三十にはなっていない。リーゼント・スタイルの頭髪をポマードで光らせ、喋る度に唇がめくり上がって軽薄な感じだった。

「大体こんなちっぽけな店にさ、三人も店員は要りゃしないよ。大将一人で沢山なんだ」

彼は言った。すると土間に新聞紙を敷いてその上に腰を降ろし、山小屋で焚火でもしているような恰好で前に手をかざしていた十八、九の女店員が、ショート・カットの頭を振るようにして、立っている男たちの方へ顔を上げた。

「わたし、計量器の月賦売りっての、支配人が言い出した時から疑問に思ったわ。お金集めて廻るだけでも大変じゃないの、毎月毎月！　それに半分取ったか取らないうちに、

みんな何処かへ引越しちゃうでしょう」
「月賦販売か、笑わせるよ。無茶苦茶に何処の家でも置いて来やあがってさ。一体どのくらい出ているんだい？」
「支配人は三千台と豪語していたわ」
うふっと同時に、話していた若い二人の口から笑い声が洩れた。年嵩の方は無感動に押し黙っていた。
しかし三人の話題は結局のところはまた、彼等が今夜受け取れるかどうかの金の問題に帰って行った。金の問題になると、貰うものだけは貰わなくちゃあ、と年嵩の男はその度に陰気な顔で言った。
問題の三田村伸作が十八貫なにがしかの大柄な体を、ゆったりと仕立てたバンド附きの外套に包んで、実際の三十七歳より老けて見える持前の物に動じない風貌を店へ現わした時は八時を過ぎていた。彼は直ぐ焜炉の傍へやって来て三人の店員の間に割り込むと、
「まあ一服させてくれよ」
いかにも俺はお前たちのために飛び廻っているのだぞという言い方をして、抱えて来た書類鞄を土間の上に置くと、煙草を外套のポケットから取り出した。そして煙草に火を点けると別段一服するわけでもなく、すぐ鞄を取り上げて、それを開け、内部から無造作に紙幣束を掴み出した。
それから三田村は口に銜えている煙草の煙を避けるために、首を捻じ曲げたまま、案外に器用な手つきでばらばらと紙幣を指で弾き、三人の店員にそれぞれその何枚かずつを渡して行った。渡す度に、いいなと念を押すように彼は相手の眼を見入った。
紙幣の分配が終ると、三田村は両手を焜炉の方へ差出して、
「数えてくれ、気は心だが多少余分にある筈だ。——まあ、それで我慢して貰うとしよう。もう少しどうにかしたいんだが、どうにもならぬ」
横柄な裁判官が宣告するように言った。三人の店員は言い合わせたように黙っていた。しかし彼等は必ずしも彼等の主人の強引さに押しひしがれたわけではなく、実際のところ格別不服にも思っている風ではなかった。ともかく月給も受け取ったし、僅少とは言え、予想しなかった退職手当らしいものも手渡されたからである。
三人のうち若い二人は、渡されるものも渡されてしまったからといった面持ちで、さして未練もないらしくさっさと帰り支度を始めた。男の方は三田村に、それではと曖昧な言い方で別れの挨拶をし、女の方はそれでも今日までの雇主の顔をちらっと見ると、いくらか悲しそうな表情で、
「明日お手伝いすることありません？」
「ないな」

「このお店も明日からはありませんのね」
多少の感慨をこめた言い方だった。
「明日どころか、今もう無くなっている」
三田村の方は無表情だった。若い娘は取りつくしまのない恰好で、瞬間つんとすると、男を誘い、二人は愛人同士のように連れ立って出て行った。
あとは三田村と年嵩の小柄な店員の二人だけになった。二人だけになると、三田村は外套のポケットに両手を突っ込んだまま、明日からは自分の名義でなくなる店内の床の上を俯向いてこつこつと靴音を立てて歩き出した。焜炉の周囲を何周もしていたが、突然足を停めると、一巻の終りか、チョンだな、三田村の口からそんな言葉が飛び出した。聞き取れるか取れない程の低声だったが、力がはいっていた。いかにもそれは自分自身に引導でも渡しているといった感じだった。それから又彼は焜炉の周囲を歩き出しかけたが、ふと顔を上げて、そこに店員がまだ一人残っているのを見ると、まだ居たのかといった顔つきで、
「とにかくこれでかたがついたというわけだが、それにしても忙しいものだな。店終いという奴は！」
そう男の方へ声をかけた。すると、
「平生、貴方が今日の半分でも働いてくれれば、店はたたまなくてもよかったでしょうな。いいや、働かなくてもいいですよ、店に居てくれればね。大体店を始めて一年になりますが、まる一日店に居たのは何日でしょうかな」
ねちねちした口調で男は言い出した。
「まあ、そう責めるな」
「責めはしませんよ。今になって責めたって始まりませんからね」
三田村の方はそれを取り上げないで、
「明日からが、君、俺の方は大変なんだ。店仕舞が判ってみろ。大勢押しかけて来るぞ。人の顔さえ見れば頭を下げて言訳しなければならない。あることないこと言って謝まるんだからな」
「そのくらいのことは仕方がないでしょう。出資者こそいい面の皮ですよ」
男は今や雇傭関係を解いて主人でも何でもなくなった相手につけつけとものを言った。
「出資者か！　そうだな、余りいい役廻りとは言えんようだ」
「よして下さいよ」
投げ出すように男は言って、それから暫く考えていたが、急に開き直った言い方で、
「他の者は他の者として、とにかく私にはもう少し色をつけて戴きたいですな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

これが言いたくて彼は残っていたものらしかった。三田村は驚いて顔を上げて男を見た。
「少ないか？」
「冗談じゃありませんよ。私はいまの二人とは違って家族を持っているんですからね。それにちゃんとした勤先を持っていたのに、そこをやめてここへ来たんです」
「そりゃあ、そうだ」
三田村は頷いたが、直ぐ、
「しかし、ない！」
ない！ を大きな声で言った。
「ないって言っても、この店を処分するでしょう」
「――――」
「幾らか都合つけて貰えませんかね」
「つかんな。この店を処分した金は一文も俺の手にははいらん。明日俺は登記に印を捺すだけの話だ。金は買手が直接出資者の方へ渡す」
「なんとかならんもんですかね」
「ならんな。君、もともとなんのかんのとうまいことを言って、金を出させ、それを失敗っちまったんだからな。店を処分した金ぐらい奴等に手つかずで渡さなけりゃならん。――しかしだな」
三田村はいつも相手を説得しようとする時の癖で、相手の眼に自分の視線を当てると、暫くそれをそのままにしておき、やがておもむろに口を開いた。
「店はたたむことにはなったが、俺は本当のところは、この仕事は失敗したとは思っていないんだ。そうだろう？ 初め、四人から五十万円ずつ集めた。ところが、明日この店の権利を売って、百六十万円はいる。一人に四十万円ずつ返してやれる。結局、彼等は、十万円ずつ損をするだけの話だ。今の時勢にすればたいした金じゃあない。ところがだ。ともかく俺たちはこの仕事で一年間喰って来た。半分遊んでいて、毎月月給を持って帰った」
「遊んじゃあいませんよ」
「遊んでいないにしても、たいして働いたとも言えまい。まあ、聞け、君が二万円、あとの二人が一万円と八千円だ。俺が――」
と言いかけて、三田村はちょっと口を噤むと、
「俺は俺でいい加減使っている」
「そりゃあ、そうでしょう」
「まあ、俺の分は十万円とするか。――併せて毎月十三万八千円、約十四万円の金をこの仕事から引き出している。一年では――」
三田村は、ここで、それを計算しろというように言葉を切って相手の顔に眼を当てた。

「百六十八万円ですか」
「それみろ、それだけ使っている。出資者のマイナスは四十万円で、俺たちのプラスは百六十八万円だ。いいやまだある。何と言ったかな、売上金を持ち逃げした奴がある！」
「そんな計算てありませんよ。この店舗の権利金が跳ね上がったんで、そんなことが言えるんで、それを別勘定にすれば、営業面はでたらめな赤字です」
　男が言うと、三田村はここで急に嫌な顔をした。
「そういう考え方をするから、君はいつまでもうだつが上がらないんだ」
　権利金だろうが、何だろうが、この仕事に関するものは全部計算に入れて然るべきだ。今時の仕事というものはそういうものなんだ。三田村はそんなことをまくし立てながら、またそこらを歩き出したが、やがて、興覚めした顔で、寒いな、帰ろう、と不愛想に言った。そして焜炉の火に気附くと、
「おい、これに水をかけておいてくれ！」
　と男に命令した。男は案外素直に奥へはいって行き、隣りの喫茶店からでも借りて来たのか、バケツに水を入れて持って来ると、それを焜炉の上に注ぎかけた。水のあけ方が多少不貞腐っていたが、三田村は自分の命令に依る使用人の最後の作業を、股を少し開いた多少傲然とした感じの恰好でじっと見守っていた。
　再び男が奥へ行くと、三田村は自分で表戸を降ろし、その一枚だけを残して外へ出ると、そこで男の出て来るのを待った。
　戸外はこの街には珍らしい深い靄だった。電車通りを隔てた向う側の店舗の燈が、その周囲の物の形象を薄ぼんやりと浮かび上がらせているだけで、あとは通行人も自動車も全く靄に呑み込まれている。男が出て来ると、三田村は、
「飲みに行こうか。そのくらいの金はある！」
　と言った。
「そんな気にはなれませんよ。年の瀬の失業者ですからね」
　それがせい一杯の反抗のように、男はじゃあと短い言葉を残すと、三田村から離れて行った。
　三田村は鋪道に立ったまま、靄の中へはいって行った不運な部下の背を暫く見送っていたが、やがて先刻店の床の上を歩き廻ったと同じ姿勢で、その反対の方向へ歩き出した。

＊＊＊

　三田村は短い距離で二つの橋を渡った。どちらの橋の上でも彼は川下の方に視線を投げたが、河畔の幾つかの赤や

青のネオンが靄を淫らっぽく爛らせているだけで視界は全く利かなかった。

三田村は二つ目の橋を渡ったところで交叉点を右に折れた。そして五、六間程歩いて行き、三階建ての小さいビルの前まで来ると、そこの一階にある牡蠣と海老の料理を売物にしている一軒のレストランに入って行った。

重い扉を体で押した瞬間、靄の中をくぐって来た三田村の眼には白い卓布を敷いて、その上にチュウリップの花を飾ってある幾つかの卓子の並んでいる店の内部が、ひどく明るいものに見えた。

先客は一人だけだった。窓際に三つ並んでいる卓子のうち一番奥を占領している。その先客との間に一つの卓子を置いて、三田村もまた窓際の席を取ったが、彼は暫くぼんやりと勘定台の横手に飾られてある大きなクリスマス・ツリーに視線を当てていた。クリスマス・イヴが明日であることに、この時三田村は気附いた。今年は惨憺たるクリスマスである。そんな思いがメニューを取り上げた三田村の心を掠めた。酒も飲みたかったが何にしても腹が減っていた。彼は註文を訊きに来た女給仕に料理を二品誂え、別にウィスキイを生で先に持って来るように命じた。

料理が運ばれて来る間、三田村はウィスキイを嘗めながら窓硝子に顔を押しつけるようにして戸外を覗いていた。窓の向うは直ぐ大川になっており、対岸にはA新聞社の大きいビルが建っている。三田村はいつも屋上に三角旗を翻し、眼を遣る度にどこかに伝書鳩の舞っている新聞社の建物を見るのが好きで、時々このレストランにやって来るのであるが、勿論今は夜であるし、靄が深いので、彼の眼には川の面も新聞社の建物もはいっていなかった。新聞社のビルの何十という窓から洩れている燈火が、対岸の靄を、そこだけうっすらと明るく見せているだけである。何も見えやあがらんな。しかしその何も見えない戸外へ三田村は顔を向け続けていた。

料理が来ると三田村はフォークとナイフを少し腕を左右に張るようにして動かした。最初のは茹でた伊勢海老にマヨネーズがかかっていたが、それを彼は三片か四片にぶった切って口に運んだ。次のビフテキも同様、この方も無造作に何個かの肉片に切ると、次々に胃の腑に収めてしまい、皿にキャベツの細片一つ残さないようにするのに何程の時間もかけなかった。

三田村はまたウィスキイを註文した。腹もできたので、こんどはゆっくりとウィスキイを嘗めて体を温めようと思った。このような晩考えなければならぬことは沢山あるようであった。確かに三田村伸作にとっては義理にでも何か考えなければ恰好がつかない晩であった。

しかし、三田村はこれまでいつもそうであったように、とことんまで追い詰められないと物を考えることはできなかった。ポケットの中にまだ幾許かの金が残っていて一カ月や二カ月はあくせくしないでもやって行ける勘定だったので、それが三田村を、実際に彼がそうである失敗者の立場に立つことを妨げていた。三田村は軽く日帰り行程の山に足慣らしして来た登山家のように、全身に軽い疲労こそ感じてはいたが、そのほかは一つの仕事を片附けた人間の持つあるのびやかさを寧ろ身につけていると言ってよかった。

「失礼ですが」

その声で三田村は窓の方へ向けていた顔を、声の方へ振り向けた。いつ来たのか、五十年配の猫背の痩せた男が卓子の傍に立っていた。三田村はすぐその男が卓子一つ隔てて向うにいた先客であることに気附いた。

男は何か言い出そうとして俯向いて口を動かしていたが、やがて臆病そうな眼を三田村に向けて、

「大変失礼なことをお訊ねするようですが」

言葉遣いは丁寧だった。きちんとたたまれたハンカチが、おそらく無意識な仕種であろうが、掌の中に押し込まれたり、捻じられたりしている。

「貴方さまは――、つまり、その――」

そんな言葉を不器用に口にしたあとで、男は漸くにして質問の中心に触れて来た。

「変なことを伺いますが、物を聴き取ることは正確でございましょうか」

「え？」と三田村は訊き直した。相手の言う意味が呑み込めなかった。

「耳です。つまり、この耳のことですが」

弱々しい笑いを顔に浮かべながら、彼は自分の右手を自分の耳のところへ持って行った。それからともかく質問を口にしてしまったことで如何にも吻とした風に、

「実は、子供が病気でこの近くの病院に入院しておりますが、その子の言うことがよく聞き取れませんもので。――看護婦にも医者にも、どうもその子の言うことが判りません。それでもし貴方さまの耳がしっかりしていらっしゃるなら、その子の言葉を聞いて戴けないものかと思いまして」

奇妙な申出であった。ほうと言ったまま三田村は黙っていた。すると相手は廻りくどい言い方でもう一度申出をくり返した。三田村はそれを全部聞き終ってから、

「私の耳が健全かどうかということをお訊ねなんですね」

初めてこう念を押すように言って、

「それで、もし、わたしの耳の機能が正確なら、御病人の

言うことを聞いてくれと仰言るんですな」

「そういうことになります」

男は恐縮して言った。格別精神に異常を来している風にも見えない。品のいい細縞のはいっている紺のウーステッドをきちんと身につけて、胸のポケットからは、薄い同色の色ハンカチを覗かせている。靴は黒、指には銀の指環をはめている。目立たないが行き届いた服装をしている。しかし風采は上がらない。ひどく体格が貧弱で薄い胸が前屈みになっている。いくら美味いものを食べても栄養として吸収しない体質があるが、さしずめそんな体質であろう。偏食かも知れない。顔も人に快感を与える種類のものではない。初め三田村はこの顔に眼を遣った瞬間血でも走っているような印象を受けたが、それは生白い顔の中で年齢に似ず唇が赤いところから来たものらしい。老人と少年とが入り混っているような奇妙な顔である。臆病で神経質なことは判るが、それも多少病的であろう。総体に葱の白根のようなところがある。精神も肉体もおそらく虚弱であるに違いない。

こんな風に相手の風貌を観察しているうちに、三田村は妙にこの得体の知れぬ羸弱な紳士を、やたらに小突き廻してやりたいような衝動が身内のどこかに起って来ているのを感じた。

「耳ですか、耳だけはとび抜けて上等のものを、親から貰いましてね」

三田村は言った。そしてその言葉がいかなる反応を相手に与えるかを半ば観察しながら、彼はどうぞと相手に椅子をすすめた。

「耳だけは昔から自慢なんです」

彼はまた言った。三田村の耳が上等だと聞くと、瞬間相手は感に堪えたような表情を見せ、それならばというように軽く会釈して三田村と対かい合って腰を降ろした。そして彼は若い給仕女を招ぶと、自分の卓子から飲みかけの紅茶と林檎を載せた皿を運ばせてから、

「申しおくれましたが、私は江藤と申します」

彼はそう自分で名のった。卓子にぴたりと体をつけて腰を降ろし、卓子の上に肘をついて痩せて節くれ立った掌を組み合わせているところは、なんとなく恩給か株の利息でも受け取りに来た人物を思わせた。

「とにかくお耳が確かだと承って安心いたしました」

本当に安心したように紳士は言った。三田村はいつか自分が優位にある人間の、落着いた気分に包まれているのを感じた。

彼はウィスキイの新しいのを運ばせると、

「僕は何をやっても駄目な人間です。ふしぎに失敗しまし

てね」

快適な心の状態は彼にそんなことを喋り出させた。急に話題が変ったので相手は戸惑ったらしかったが、

「そんなことはありませんでしょう」

と呟くように言った。

「いや、本当の話です。仕事に失敗して今日店をたたみましてね。今も今、明日からどうするかということを考えるためにここにやって来たというわけです。ウィスキイでも嘗めていたら、いい智慧でも浮かぶかと思いましてね」

実際にその通りであることはあった。しかし喋りながら彼は不思議に満足であった。喋っていてそれがどうしても自分のこととは思われなかった。店仕舞の夜の話相手としてはこれ以上恰好な人物はないわけだった。

「そういうわけで、私という人間には何の取柄もありません。もしあるとすれば、それは御質問の耳ですかな。耳だけはふしぎにしっかりしています。誰にも聞えない遠方の雷鳴が聞える。それからこれは小さい時からのことですが、地震の地鳴りが誰よりも早く聞えて来る。尤も常人より五秒か六秒、極く僅か早く聞えるだけの話ですがね」

三田村は口から言葉を出しながら、もしかしたら本当に俺は耳だけは確かかも知れないと思った。

「聴覚の鋭敏の度合を計量する機械がありますが、御存じですか。あいにく私はまだそれを使ったことはありませんが、ひとつ、こんどそいつを使ってみましょう」

「そんなものがありますか」

「あります。私は商売であらゆる種類の計量器を取扱っているので知っています。しかし私もまだその品だけは店へ入れておりませんが——」

「ほう、計量器のお仕事をなさっていらっしゃるんですか」

「いや」三田村は言った。

「昨日まではそれを販売していたんですが、今申しましたように、今日店をたたみましてね。失敗したんです、みごとに。——莫迦なことですよ」

それから三田村は如何にして自分がこんどの仕事に失敗したかを披露するつもりだった。大体ですな、計量器の販売というものは——。彼がそんな切り出し方をした時、

「どうでしょうか、お願いできますでしょうか」

話の腰を折って相手は言った。

「随分御迷惑なこととは思いますが、ひとつ病人の言葉を聞いてやって戴くわけにはゆかないものでしょうか」

「私が聞くんですね」

三田村は話が最初の問題に返ると、少し不機嫌な顔をした。そして煙草を銜えると、視線を相手から窓の方へ持っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com